

<編集後記>

初年次教育学会誌第12巻第1号をお届けできる運びとなりました。このところ、年度内発行が叶わなかったことがありましたので、今号は何とか年度内発行に漕ぎつけることができ、少々安堵しております。

ただ、学会誌として量的には少々物足りなくお感じになる向きもおありになるかと存じます。査読論文については、投稿は4件に留まり、審査の結果、そのうち事例研究論文1件が掲載という、やや寂しい結果となりました。投稿論文の母数が少なく、次号においては、学会員諸氏の積極的な投稿をぜひとも、本当にぜひともお願いしたいところです。査読においては、例年同様、会員の中からお願いした査読者に懇切丁寧なご協力をいただきました。査読作業にご協力いただいた的確なコメントを下された査読者の皆様には、あらためて御礼を申し上げたいと思います。また、自著紹介については3件の掲載となりました。

シンポジウムの記録についても、本号では少し変則的な形になっています。通常は大会企画シンポジウムと課題研究シンポジウムが並立する形になっていますが、第12回大会(創価大学)においては、大会校・課題研究委員会合同企画シンポジウム「初年次を超える初年次教育～キャリア形成支援の視点から～」として開催され、基調講演2本と報告2本が執り行われました。それぞれ、基調講演1「大学から社会へのトランジション—データに基づく教育改善：初年次教育を動かす—」中原淳(立教大学)、基調講演2「大学へのトランジションから見た初年次教育への期待—高等学校におけるキャリア教育を通して—」望月由起(日本大学)、報告1「学修フローチャートとラーニングルートマップの作成・活用」濱名篤(関西国際大学)、報告2「初年次教育とキャリア教育の連携と初年次教育推進室の役割」上田大作(創価大学)として本号でリアルに採録されております。いずれも大変充実した内容になっておりますので、特に大会に参加できなかった会員の方は、是非ご一読いただきたいと思います。

本誌は装丁も素朴であり、また学会誌として重厚であるとは言えませんが、初年次教育という独自かつ重要な領域の研究・実践の成果を発信する大切な役割を担っています。また装丁の素朴さと同様、学会運営も多様な専門領域の方々が協力し合っているもので、実直な運営が進められていると思います。これは、本学会の良さであると個人的には思っております。今後もこの空気感が続いていくことを願っています。

また、毎度のことながら年度後半から年度末にかけての慌ただしい中、頼りない編集委員長を支えて下さった編集委員諸氏にも、心よりお礼を申し上げます。拙いながらも本巻が発行にこぎつけられたのは、ひとえに彼・彼女らの貢献によるものです。また、会員の皆様からの変わらぬお支えも、引き続きお願い申し上げます次第です。

初年次教育学会誌編集委員長 川島啓二(京都産業大学)